



©APDA

2006年 新潟県旧山古志村中山隧道の前で

2004年から2005年にかけて世界各地で大災害が起きました。APDAは、コミュニティの能力を強化し災害に対応してきた日本の経験を理解してもらうために、インド洋大津波で被害を受けた、タイ、マレーシア、インドネシア、インド、スリランカ、モルジブの議員とパキスタン北西部大地震で被害を受けたパキスタンから国会議員を招き、東京で防災に関する国際会議を開催し、東京と新潟で地域のボランティア組織の防災対策についての視察を行いました。

日本は毎年のように台風被害や豪雪、地震など天災に見舞われます。しかしこの厳しい環境の中で人々が手を取り合い協力することで自発的に防災・復旧活動を行ってきました。中越地震で最も甚大な被害を受けた旧山古志村は日本でも有数の豪雪地帯であり、60年程前まで冬は陸の孤島となっていました。

村に病人が出て冬の中峠越えができずに亡くなってしまう例が後を絶たなかったといいます。冬でも雪に阻まれることなく交通の手段を確保したい。この願いから山古志村の人々は村人の力でトンネル(隧道)を掘り始め、16年の歳月をかけ、全長922mの日本最長の手掘りのトンネルが完成しました。この中山隧道は中越地震でも崩壊しませんでした。

東南アジア各国では早魃などを除けば、あまり天災に見舞われた経験がなく、その天災に際してコミュニティレベルのボランティア組織がどのような役割を果たしうるのかについての概念そのものがありませんでした。参加議員はこの視察を通じ、災害復興におけるコミュニティの役割を理解し、また日本が戦後「新生活運動」として実施したコミュニティ組織を通じた女性の地位向上、所得創出プログラムなどの経験を学びました。

In front of Nakayama Tunnel in former Yamakoshi Village, Niigata Prefecture, Japan, 2006

The year 2004-2005 witnessed a number of large-scale natural disasters in many parts of the world. In 2006, APDA invited parliamentarians from seven Asian countries that had suffered from natural disasters, especially the tsunami in the Indian Ocean Tsunami in 2004, to participate in a conference and a study tour on disaster management and community capacity building. Japanese community-based organizations have been

playing an important role in working on disaster management and reconstruction; supporting women's empowerment; and promoting social and economic development. Nakayama Tunnel, Japan's longest hand-hewn passageway, represents a good example of the community self-help spirit, as the villagers worked for 16 years to construct the 922-meter tunnel to keep open a winter passage from their isolated village to neighboring villages.

